

貧窮問答の歌一首 并せて短歌

八九二番

風交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべてなく 寒くし
あれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒 うちすすろひて しばぶ
かひ 鼻びしびしに 然とあらぬ ひげ搔き撫でて 我を除きて 人
はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有
りのことごと 着襲へども 寒き夜すらを 我よりも 貧しき人の 父
母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 乞ひて泣くらむ この時は いか
にしつつか 汝が世は渡る

天地は 広しといへど 我がためは 狭くやなりぬる 日月は 明し
といへど 我がためは 照りや給はぬ 人皆か 我のみや然る わく
らばに 人とはあるを 人並に 我もなれるを 綿もなき 布肩衣の
海松のごと わわけさがれる かかふのみ肩にうち掛け 伏せ廬の
曲げ廬の内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子どもは
足の方に 囲み居て 憂へ吟ひ かまどには 火気吹き立てず 飯に
は 蜘蛛の巣かきて 飯炊く ことも忘れて ぬえ鳥の のどよひ居
るに いとのかきて 短き物を 端切ると言へるがごとく しもと取る
里長が声は 寝屋処まで 来立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきも
のか 世の中の道

八九三番

世の中を 憂しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあら
ねば